

ドイツにおける有機農業の現状と課題

ドイツは「有機発祥の地」とも言われ、市場、生産、認証、政策などといった有機農業に関するあらゆる面で世界トップレベルを誇ってきた。しかし、有機食品に対する消費者の関心の高まりに伴い有機食品市場が拡大する一方、有機食品価格は低迷した。そのため、有機農業経営者が意欲を失わないような支援を充実することが喫緊の課題となっている。

1. わが国の有機農業をめぐる情勢

SDGsや環境を重視する国内外の動きが加速していくと見込まれる中、わが国の食料・農林水産業においてもこれらに的確に対応し、持続可能な食料システムを構築することが急務となっている。このため、農林水産省では食料・農林水産業の生産力向上と持続性の両立をイノベーションで実現する「みどりの食料システム戦略」（令和3年5月12日）を決定した。

同戦略においては、2050年までに目指す姿の一つとして、「2040年までに主要な品目について農業者の多くが取り組むことができるよう、次世代有機農業に関する技術確立を確立する。これにより、2050年までにオーガニック市場を拡大しつつ、耕地面積に占める有機農業の取組面積の割合を25%（100万ha）に拡大する」ことが明記されている。

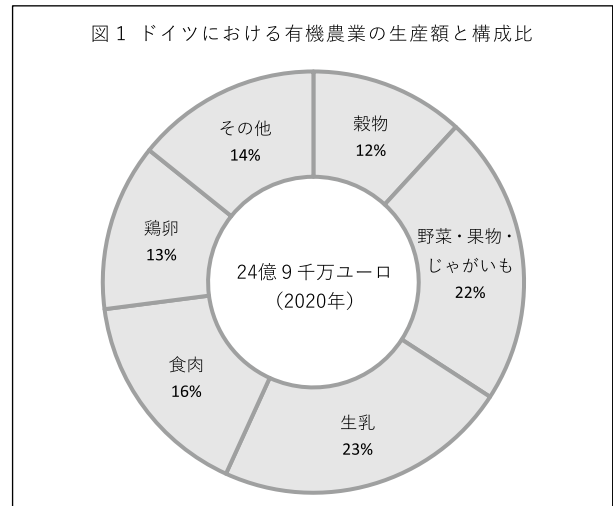
さらに農林水産省では、この「みどりの食料システム戦略」を踏まえ、「持続的な畜産物生産の在り方検討会の中間とりまとめ」（令和3年6月24日）を策定し、わが国で持続的な畜産物生産を行うために必要となる環境負荷低減、耕畜連携などの取組の方向性を提示した。

そこでは、有機畜産に親和性の高い放牧に着目した放牧型畜産の推進について次のように言及している。「多くの農家が大規模に取り組むことは難しい面もあるが、土地生産性を落としても労働・資本生産性を上げる管理技術が確立されれば、自然循環機能を大きく増進し、環境負荷を軽減する取組である。わが国における有機食品の市場規模は伸びていることから、消費者ニーズに対応し、今後の関連技術の開発・普及により、畜産物でも拡大が期待される。」

2. ドイツの有機農業支援策の展開

ドイツが有機農業大国となった背景には、国内の有機食品市場の拡大に加え、国や州などによる政策の存在が大きいと言われている。1980年代、慣行農業による問題（環境汚染や生物多様性の危機）が顕在化し、代替農業の必要性が叫ばれるようになった。このような状況の中、1989年には一部の州において「農業粗放化政策」のもとで有機農業支援が開始され、有機農業に転換する生産者に対し助成金が提供された。以来、有機農業支援策は全国各州で展開されるようになり、2020年における農業全体の生産額（456億8千万ユーロ）のうち5.5%が有機農

図1 ドイツにおける有機農業の生産額と構成比



資料：BOLW(2021) Branchenreport 2021, Berlin:12

業の生産額（24億9千万ユーロ）、その22.6%は有機生乳が占めている（図1参照）。

寒冷地の多いドイツは農産物の輸入国である。有機食品に関しても、温暖なスペイン、イタリア、フランス、アフリカ諸国や南米からの輸入が多かった。また、有機食品の販売に関しては、1990年代まで農家での直売、都会の専門店での販売が主流であった。このため、有機農用地面積は2015年頃まで伸び悩んでいたが、その後の有機食品市場の拡大に伴い急速に増加し、2021年に1,802千ha（全農用地面積の約11%）となっており（図2参照）、この半分以上は永年草地在りである。

3. 有機生乳価格は生産コストを賄えていない

21/22年度におけるドイツの有機生乳に関する生産コストと生産者価格を比較すると、生産者の公正な報酬を含む生産コストは66.97セント/kg、2021/22会計年度の生産者乳価は平均52.31セント/kgであった。これは、生産者価格では生産コストの78%しか賄えていないことを意味する（表1参照）。

実際には、2021/22会計年度において、有機生乳の生産者は生乳代金として52.31セント/kg、補助金として11.77セント/kg、合計で平均64.08セント/kgを受け取った。農業生産資材代金と一般的な経営費から子牛の販売収入を差し引いた生産コストが55.26セント/kgになることを考慮すると、生産者の実質収入はわずか8.82セント/kgであった。これは、労働協約における「適切な収入額」

表1 ドイツにおける有機生乳の生産者価格と生産コストの推移

単位：ct/kg

	2012/13	13/14	14/15	15/16	16/17	17/18	18/19	19/20	20/21	21/22
生産コスト①	64.76	69.13	69.53	66.90	62.87	61.23	63.43	64.37	64.29	66.97
生産者価格②	41.55	47.63	47.07	48.04	48.05	48.54	47.40	47.17	48.65	52.31
(②/①)	0.64	0.69	0.68	0.72	0.76	0.79	0.75	0.73	0.76	0.78

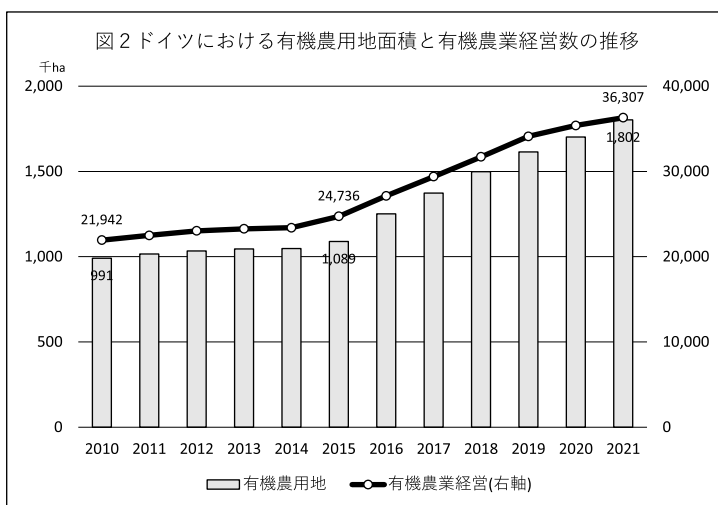
資料：European Milk Board、2022年11月15日公表資料より作成

のわずか38%である。この「適切な収入額」とは、約25ユーロの平均時給（雇用主の拠出金を含む）に基づいて計算されている。これらの事実を照らして、社会的および経済的に持続可能な収入目標は、有機生乳生産の場合には保証されていないと言える。すべての酪農家は、生産コストの再上昇に苦しんでいる。一般の生産者乳価と比較して、有機生乳の生産者乳価はほんの僅かしか上昇しておらず、これは大幅なコスト割れが一般的であることを意味している。

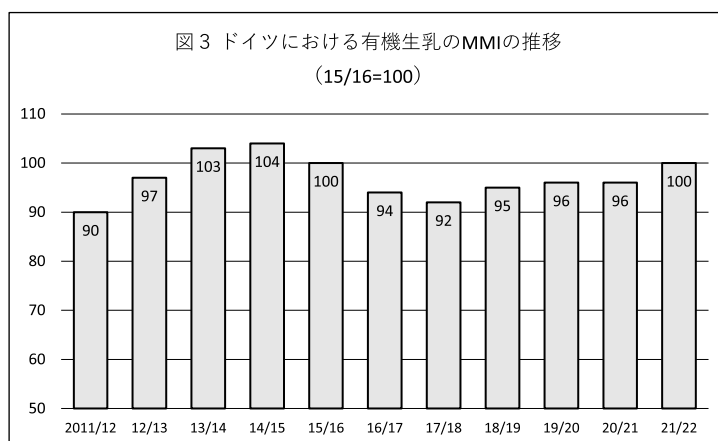
ドイツにおける有機生乳の生産コストに関する指数MMI（Milk Marker Index）は、農村社会農業局（BAL）によって算出され、毎年更新されている。MMIは生産コストの変動を表しているが、2021/22会計年度のMMIは100であり、これは基準年2015/16（2015/16=100）と同水準であったことを示している。なお、2017/18会計年度のMMIは92であったため、その後の4年間に生産コストが8ポイントも増加したことになる（図3参照）。

4. 今後の見通し

欧州委員会は、2030年に農用地の25%を有機農業とする目標を掲げているが、多くの調査結果は、このままの増加ペースで推移すると同割合は15%前後にとどまることを予測している。また、有機農業と親和性の高い粗放的な放牧が比較的多く行われている欧州においても、生産コストが増加するなかでは、有機生乳生産への転換のハードルが高いことが窺える。ドイツやベルギーなど一部の国では、収入に占める補助金の割合が100%を超える有機農業経営もあるという。また、消費者の購買力が低下しており、有機乳製品などの高価格製品の売れ行きが低迷しているという報告もある。したがって、有機農業への転換は、収益面や労力面において生産者にとって必ずしも魅力的な選択肢とは言えず、引き続き、政策面での支援が重要な役割を果たすとみられている。



資料：BMEL(2021) Strukturdaten zum Ökologischen Landbau in Deutschland



資料：European Milk Board、2022年11月15日公表資料より作成